

電子複写不可

複製史料

昭和37年7月 日

沖縄作戦

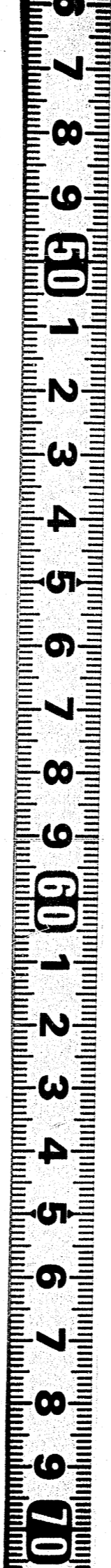
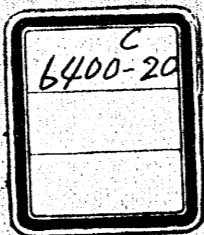
伊江島守備隊

鬼玉軍医手記

元陸軍混成第四十四旅団第一大隊本部付

軍医

防衛研究所



伊江島守備隊

此の小冊を南海の孤島伊江島に華々
しく散つた幾多英霊の遺族に捧ぐ

伊江島守備隊

警備部隊は独立混成第四旅團第二師団第一旅團

昭和十九年九月五日沖繩縣國頭郡名護に於て編成される。新隊長は陸軍少佐

井川正は大分縣人。年令三十九。部隊の根幹をなすは大分縣中宮崎、

唐島、西郷出身の將兵約三百五十名にしてこれに加ふるに現地召集の兵約五百名を以てす。

編成上は名護地区以北の防衛を任ぜらる。九月十九日より十月五日の間伊江島に飛行場設

定工事に従事す。十月四日名護帰隊。十月七日本部半島(トビガサ)崎中野

地区防衛の新任務を受けて進駐す。十月十日才次空襲(南西空襲)を受

けたるも大隊の人員資材に損害なし。即日全部隊眞山岬の連聖高地に配備され

陸地備案に専念す。十月十七日夜半突如として伊江島進駐の命到る。

十二月一日伊江島進駐開始する。此の目前に來る雨は積りぬれども海上は高き

ルでサーフ(珊瑚礁の環礁)に吠ゆる海流は如沸く。運命島(伊江島)へ行く將兵

の飛行を家敷するやどであった

伊江島は本都平島、美瀬岬を西に隔たる市田村、東西約八村、南北約四村の大略

積田政、小島に、東部中央に宛然置物、妙に裸の若山が一つ坐つてゐる。標高約二

百米、村民はまれをこの信仰の如く朝夕に仰いでゐる。即ち伊江城山である。此の山の外

は全島は一様な平地で汎く耕される。島の北岸一帯は数十米の珊瑚礁の断崖が延び

その絶壁上の高地は是後す限り断崖の自然林が続き、紺碧の海は沖合の環礁にはま

つて南海の孤島といふ風情を呈してゐる。城山の南麓一帯に村落あり、戸数約二千。

人口七千五百。全島は何処でも地下約一米に到れば堅い珊瑚礁が現れるに拘らず、

甘蔗、椰子は一年中豊かだ。近海漁業を併せて、島民は安樂な幸福な日を送つて居た。

昭和十九年早春以来陸軍飛行場大隊が駐屯して此の飛行場を設営して居た。

我が部隊は伊江島到着と同時に、既に島内より同島に駐屯して居る独立連射砲

隊に独立機関銃の各一中隊計約二百を其の指揮下に入して、直ぐ陣地の構築に着手した。

此等事に於て亦も林もたい小島に於て、予想する敵の強烈な砲撃に堪へ、復讐の
敵を撃退するに地下の堅固な陣地に據るの外はない。將隊も亦も全隊が砲
砲撃の山、砲撃の地に何つて夜も晝もない戦いを繰り返した。此れども資材難は我が苦
しの、近代的機械は無論ない。火薬も銃金も餌も燈油も常に不足くあつた。
毎晩遅く作業帰りの軍歌を聞か、寒い夜中に起出を行く兵隊に住民は深い同情の詞
を漏した。然し我々には其時既に無理な過勞を言つてゐる餘裕はない。レイチ
の戦い友軍の奮戦に拘らず我々の期待の如くは進展しなかつた。今更には「タラ口
パン」を基礎とするのが、我々の偵察し始めた。南西諸島の海域に於ける敵潜水艦の
跳梁は益々強しく、日本輸送船撃沈の報は相次ぎで我々の耳に入つた。ルンビに於ける
敵軍優勢の報に頃よりは敵機の偵察は益々頻りに、敵の次期作戦地が南西
諸島に於けるが濃厚なる事となつた。 昭和三年一月三日には敵機初部隊による
福原、伊江島、飛行場等に部落全般に於て加へられた。此の強烈な空襲は九日

操道未だ、午後と始り、お十戸が合流した。即ち隊長蒲池中尉（精の避難
隊も直撃弾を食りて破壊し、中尉は胸部敷面に負傷した。同様の福爆は三月
一日にも行はれ、民家は次々に焼けて行き、各戸を取圍む福爆の濃緑は見苦しい赤茶
色に変わった。此の年の冬は沖縄に珍しく寒い冬で、雨の日も多かった。此の寒中を
兵連は陸地備束の合圍くを肉攻、刺込みの猛訓練に勵んだ。何の嫌案もない
此の勝島に数々の困苦を耐めながら兵は不平も痛まらず、寧ろよく働いた。それは井
川部隊長を中心として、全員が一致団結し、皆が同じ苦勞を味はし、勵まし合ひ、慰め合っ
て居たからである。将校は殆んど大部隊が豫備役の召集将校で、世の中、暇も甘
いも、克己に味はつて来た四十才以上の人が多かった。部隊長を始めとして、将校も兵も
昔に石粉と油煙にまみれて、遠く推しに行き流して居た。

井川部隊長は支那事變の勇將で、胸面に輝く金勲と、負傷による独特の豪傑風
の歩き振りは、一見畏怖の感を抱かせるが、実は人情部隊長として、兵隊は勿論、住

民がらも敵愛を一身に受けて居た。副官緒方中尉(熊中尉)は「モンハン」戦
の勇猛中隊長で、鋭利な目と刀の如く冴え抜いた頭腦を以て部隊長を輔け、部隊
を引締めてくれた。又配属した連射砲中隊長諸江大尉(佐賀縣)は典型的
善悪武士で、卓越せる戦術眼、思威併に行ふ高潔な人格は將兵位民の徳望
の的であつた。部隊長と頭として此の三人が一身同作となり、最後迄部隊を力づけり
と握つて寸毫の揺れも見せなかつた。

二月六旬遂に公式に「作戦」(天号作戦)の幕が上がり、沖繩が戦場となる公算は愈々増大し
た。之れを畏怖する如く、敵機の偵察は益々頻繁となり、夜久地に到る八杓の海峡の晝間
航行する危険になつた。夜に月影は近海に輝き、陸火信号が望見された。位民の本
部平島への疎開が軍により提唱されて、老幼を殆どして、位民が別れを告げ、後
に海峡を渡ら。將兵の顔には緊張と決意の色が一日と強く刻まれ、行く。多く
の將兵は政御の母に女に妻に、キルとなく別離の手紙をまきき送つた。全員此の

孤島を墮落の地とする覺悟を堅めた。何故なれば此の伊江島は、此の伊江島に飛

行場は軍事的に最も敵の目を惹く存在であり、又其の地勢は餘りにも守備に難く、

守備隊は其の數に於ては、その裝備に於ても、優秀な準備を誇る敵を撃退す

るには餘りにも貧弱である事を皆よく知り、抜いて居たのである。唯、部隊長日頃

の訓示の如く、全員の生死を超越し、全力を盡して一人でも多くの敵兵を、一

戦車を撃死し、一日でも長く此の飛行場を敵手から守り、假令我々は伊江城山

村に屍を曝すとも、之れにより沖縄を我が手に於ける友軍の作戦を裨益せしむと祈念

した。

二月十日、建國祭には雨中、全員の角力と演藝に一日を打興じたが、誰も之れが

此を占める最後の團樂となすであらうと言ふ一抹の哀愁を抱いてゐた。東の如

く聖土にあり、敵の有力機部隊の侵入、其の進路が南西諸島に向ひ、沖

繩上陸の算大なりとの軍参謀情報に全員の緊張す。畑や道路には爆発物が

敵艦せし。予の夜には隊長會同が召集せし。種々の打合せなされしが、その夜上
敵の硫黄島上陸の機が入った。硫黄島攻撃の善戦勇奮に次ぐ悲壮なる最
後の報を聞き、我々は訓練に没地備案に層々精進を繰り上げた。
首二旬の或る日、春らしき閑な日影が漸く西の洋上に傾かんとする頃、聯隊長
宇王大佐(長崎縣)が本部半島の山中から海峡を渡つて來、我が部隊を訪ねられ
た。我が将兵は子供が久し振る父親に會ふ様な氣持でお迎へした。聯隊長は
敵の夜襲予が何時中夜に向ふかも知れぬ緊張した情勢下、部下を激勵し、同時に
それとなく別正を告げ、來たものと察せられた。任務上諸子と同一戦場で戦ふ事
の出来ぬのは、聯隊長の深く遺憾とするところであるが、大隊長を中心として敢闘せ
よ。必勝の信念は決死の覚悟を多し生ずるものなる事を銘記せよ。翌夜二回は
聯隊長と取巻の二氣矢を上げた。
首二旬、情勢の緊迫に應じて防衛召集がなされた。四五才迄の沖繩野人が

自ら伊に島を準備した。多数約八百。茲に於て伊に島守備隊は我が部隊(原宿隊を含む)と防衛隊及び飛行場大隊(約二百名)、三部隊より編成され、各々備地隊が決定され。即ち我が部隊は東飛行場より以東、田村飛行場大隊は飛行場地区、防衛隊は「山山」^{ヤマヤマ}「マジヤ」^{マジヤ}一帯の地域を夫に擔當守備する事になった。(著尾の地圖を参照して下さい)。然し我々の部隊を除く他の二部隊は孰れも戦術訓練も充分なま、殊にその整備は問題になぬ程の貧弱なもので、小銃も少く小銃・軽機・外は手榴弾と急造相爆雷、それ信じていぬ機であるが竹槍がその武器であった。

三月下旬の某日、晴天の霹靂の如く飛行場破壊命令が飛行場大隊に下達された。第一、飛行場址島に於ける失敗に鑑みて近代的な飛行場を目指して着工した。第一、夜間飛行で完成も漸く目前に迫る。特攻の一戦隊も近く来島するとの噂に於て民も大に期待してゐた際、自ら之れを徹底的に破壊せよとの軍命令、田村部

隊長の胸中には激怒するに餘りもがあらう。軍曹が如何なる意図によるかは我々の想像の外にあるが、作戦上伊江島飛行場を使用しなくなるか、或は伊江島守備の困難性を認めその措置が、兎に角、田村部隊と防衛隊は共同して建設に努める困難は、破壊作業と同様した。

我が部隊の内地構築は各中隊共孰れも一段落の域に達した。伊江城山麓より部隊は一体は連の地下要塞と化した観あり。十数米の地下に数十米の壕が縦横に連れた。作業の間、くに紅蓮は箱爆雷を造る。自今が抱いて敵戦車の下に飛込む可き箱爆雷を黙々と造つてゐた。

軍の整備によう住民の露伴避難は拍車をかけられ、約三十名が敵機を避けて暗夜の海峡を渡った。毎日の所々B²⁹が無気味な偵察を行つた。破壊された滑走路の上を低空で旋回を行く。

沖島の三月はもう全く春を告げるの四月末迄の暖かみで、鷲や鵜が啼き響く

果の空を命に未だ。人間の世は無情層に自然は長閑な春であつた
此長閑な春の神寂を妬みて、津橋は死闘が突如として展開されたのは三月二十日
であつた。此の朝からこの日零天は時折り小雨を降せてゐた。午の八時空襲警報
が鳴り、戦備が下令された。然し空襲は毎度の事であり、此等も何れもの空襲に
方々のた。惟、敵の前に敵有力機動部隊が九州、四國方面を襲撃した後、南下して、
あるとの情報があり、或はこれに敵沖繩作戦の牽制に非ずやとの傳ひ、敵感は益々
持てぬた。唯、常々空襲を畏れ、空襲は翌二十四日にも續けられた。然も二十四日の空襲は
一日中執拗に續け、行はれてゐるとして、評落を焼拂ひ、かく如くに見えた。これは
少、可憐なほどと思つてゐる時、敵艦が島尻郡渡川を艦砲射撃してゐるとの情
報が入り、續けて早くも敵の慶良間列島上陸が報せられた。今度来る可きも、来
たのである。命令により、今更評落の宿舎を引揚して、各隊の棲息處に移り、戦闘
に備へ、各人身の通りの整理を完了した。

5
10
15
20
25

翌三十五日、遂に敵上陸に備へる甲號戦隊が発令された。此の目処ありて我々の目に敵艦が見え始め、城山より見る南方海上には大六の敵艦が現れる。伊江島の周辺にも宣正、龍運、龍子十数隻が遊弋し始めた。敵も撃ちぬ我も撃ちぬ、戦気を起した。無気味な沈黙が島を蔽ふてゐた。南方洋上の敵艦は刻一刻と数を増し、やがて見渡す限り、水平線上に小島の手前戦艦、巡洋艦が艦々相磨きあはかりに舞ひ合はれた。正午頃から光芒一閃又一閃、耳を聳らす。艦砲の音が静寂な空気をゆすぶつて轟き始めた。残存の敵艦の行方まを察し、各方面を射撃しつゝのさし。二十六日も朝赤敵艦の鋭い砲撃があり、然も正午過ぎから遂に敵艦砲撃が伊江島の島加へるに始めた。飛行場、部落、城山附近に到るや、亡目滅法に撃つて来た。未だ満三ヶ月の血と汗で染み付いた我々の壕は予想以上に固くあつた。直撃を受けたりもあつたが損害は皆無であつた。然し、艦砲射撃と爆撃により部落の大半は破壊し、焼く掃かれた。家と失ひ敵弾下に曝された住民は軍の優や

海岸、自然洞穴中へ避難した。ニ十七日軍参謀部至に所部各部隊の情
報として、敵艦予想地奥は主力を以て濠洲地区、一部を以て嘉手訥、伊江島、早良上
陸する算大なりと。

二十八日午前四時頃、全員集合を命ぜられ、東天のほかに明くま方を拝むが如く
「天一號作戦は皇國安危の決するところ……」と云ふ 聖旨並に参謀總長の
激勵の詞を拝受した。

夜が明けぬや否や、敵機は日課の如に百中島の上空を旋回し、何か変わった物を見付け
ると狙を確に掃射する。敵艦は日毎に多数を増し、殊に残波岬の海上は敵艦を以
て蔽はれ、水手等は艦影が全く埋まら有様である。伊江島より肉眼にて數へる巡洋
艦以上の巨艦は常に六十七十隻に達してゐた。しかも其の程持て来たものと早れは
かりである。之れが太平洋海軍である。と云ふと舟達は嘆息した。

敵の上陸同様の報は未だない。敵は恐らく嘉手訥を以て此の作戦に取掛つてゐる

5
10
15
20

大規模な戦いで、敵軍の大規模な襲撃を、徹底的に予備射撃を行ふこと
を期す。これにしても敵軍の未だの進路を越すのに、唯二機の反軍機
の襲撃に注意する。神合艦隊の初夜は、唯二機の反軍機は、暗夜の南方
海面に出現、防衛砲火を見たのみである。又、敵軍は折からの月明の海上を夜目
にも白く照らし、エンジンの音を高く立て、友軍の④(水撃機)と思はれるもの
が小銃、木銃、手榴弾、ガスマスク、伊江島の前を運ぶ、南方へ消えて行くのが認められた。
また、同艦隊の激戦の要衝に比して、それは余りにも微力と思はれたが、それだけに
余計な悲壮であり、見送る物に執りもがたしう。敵沖尾末龍夜の新機は
まず敵軍の大軍を海上にたどる、等とて、同くそれた戦いの話は何日実現す
るかを尋ねる。

胃日(注)敵は一部を以て、濠洲方面に移動を行いつ、大舉着手、北谷正面上陸
を開始した。その前日、南方方面に於ける艦隊射撃の猛烈さは言語に絶した。遂に望を破
る。

5
10
15
20

証しは、右方へ飛ぶと土砂を巻き上げる煙に一面に覆れて来た。

斯くて伊江島は我々の予想に反して、敵の才次上陸から取残された。上陸軍と友軍との戦況

を毎日海軍で用いた。日ごろは海中生活に馴れて来た。兵の顔は延び、顔色は白くなったが士

気は益々旺盛であつた。福山を計中尉(佐々木)の努力により、今迄の不足分の給兵に比

して、豚牛鶏動が毎日兵の配給に余裕を満足させた。まきは倉庫に上置に敵機が

舞ひ、夜には兵の島の周囲に砲艦から砲弾が飛んで来る。一歩も外に出れば何時

でも生命の保証は出来ないので、壕中を先づ安全である。敵は伊江島上陸は既に時日の

向題である。敵を前にして、特におもて最後の準備をした。浮城の仕上げ、武器弾薬の

準備も、カノに内居を治し、健康を害さない様に細心の配慮が持たれた。最後の兵見倍

は既に伊江島の進駐の時から出来て居る。誰か全兵を内題にする者は居なかつた。

三月三十一日、井川部隊長を隊長とする本部の全兵と各隊の幹部者が會食を催した事

がある。場所が城山中腹にある戦闘指揮所の斜面で、松も粗な木と、眼前に遊戈す

10

15

20

25

(12x25)

14

(P. 2)

敵艦にも時折の通り来る敵機見よ見え。然し誰もそれを見よる者はない。微
塵を帯びた部隊長は得意の安末節を踊り、前方副官も十八番の黄金虫を舞
た。機長は全員が腹の底から湧き、意気は敵を呑んだ。深松(軍曹)は松の切り株に片
脚を掛けて、眼前に浮かぶ敵艦に手を打ちかざし「ヤア／＼遠か／＼ものは音にも聞け、近くは
穿つて眼にも見え、我こそは……」とまぶ晴しく太い舌で叫び掛けた。五条(訓導)
みて、戦野に屍^標をすとも、武人の覺悟がねてより、一髪土に残さずとも、喚言に何の
悔やある……」福山(中尉)は合せて全員の歌、戦陣訓の歌が、松影漸く
濃くはた伊豆成山腹から、茜色に暮れ行かんとする夕雨の中へ消えて行た。
四月三日には夕方待た待た友軍特攻機が来た。物凄の弾幕の中を次々／＼に突
込んで行く。忽にして北方海面で砲台艦がその四隻が黒煙を上げ、南方には砲台
艦一隻が轟沈。他に三隻の黒煙を消めた。然し我々の上空で友軍機二機が敵機兩
機に取巻かれて火を吹きつ、美空も渡久地海峡に落ちたし行くのを止る事は出来
ない。

大に驚くこと惜しかつた。其夜と連は豊田の特攻隊を誘ひ、佐連も何時死んでも心残り
りはないと話し合つた。

正午過ぎには高松浦に陸上を敵軍は中島を西断して南に退み、北は既に高松浦道
り、南は三木の道を仔進して、高松浦は中城村津西朝に到つたといふ。大隊高松軍連
比嘉中尉は津西朝の自分の家が今頃敵の砲火を浴びてゐるやうにとつぶやいた。妻子を
戦場に残して離島に戦中絶命軍人の心情を察して誰も慰める言葉もなかつた。

掃海艇はありの所に伊江島周辺と掃海し、返久地海峡にも敵艦が入つて来た。高松砲
も巨砲も持たぬ我々には飛行機や空艇には手も足もなかつた。西岸燈台附近に空艇連
きれこの永徳少尉(彦根島特)掃海下の兵隊は、余りの口惜しさに掃海した敵艦追
艦に掃海を射た。敵艦も掃海で急射して来た。敵艦も笑しかつたといふやう。

四月八日午後五時、島の上空を旋回してゐる二機が島の東部裏地に到着の爆弾を
下し、第一弾が松岡伍長(特)の幸ひの二機が島の東部裏地に到着の爆弾を
下し、第一弾が松岡伍長(特)の幸ひの二機が島の東部裏地に到着の爆弾を

5
10
15
20
25